サイエンス読書カフェ

店主の独りごと（第3回）

前日本科学技術ジャーナリスト会議会長・元読売新聞編集委員
小出重幸

ミニだからこそ伝わる

「少人数で落ち着いた雰囲気でのディスカッション、あまり経験がありませんでしたが、とてもよかった……」

マスコミの世界で長く仕事をしてきて、感じていることを一つお伝えします。大勢の人たちに同時にものごとを伝えるうえで、新聞やテレビなどのマスメディアはとても優れていますが、一方で、伝える対象が大きくなるほど、ものごとの〝本質〟は逆に伝わりにくくなるという、相反現象があるということです。

佐藤健太郎さん（右）の著書を紹介する小出店主（左）

受け手が多様になるほど、さまざまな受け止め方が存在し、またインパクトも一様ではないため、無神経には発信できない、言葉や表現を選ぶ必要が出てきます。いきおい、ものごとの本質もストレートには表現しにくい、という制約が生まれます。

一方で、少人数、ミドルサイズの討論やインタビューでは、より自由なやりとりが可能になり、公式の席では率直に表現できない思い、その人となりを支えている思想、体験に基づくひとことに、直接触れることができます。こうした場では、ものごとの本質も比較的ストレートに伝わります。

私たちは、研究者、行政官など、さまざまな領域の人たちをインタビューする機会があります。これはなかなか得がたい体験で、近い距離感での対話を通して、大切な本質を受け取ることができます。これをマスメディアで伝える際には、もちろん多くの制約が重なり、記事にならない要素も増えますが、私たちがインタビュー取材の際に受ける感動、当事者のメッセージをもう少し多くの人たちと共有したい――これが、「著者と語る サイエンス読書カフェ」の狙いです。

2017年3月のスタート以来、大半のカフェに著者が登場。あるいは、著者に代わって、教え子や同じ活動を進めるお仲間に参加いただいたケースもありました。20人に満たない人数なので、質問し、意見を述べるにあたっても〝垣根〟が低く、アットホームな雰囲気で討論が繰り広げられていきます。この距離感、相手の顔を見て対話ができる、という場は、著者にとっても居心地が悪くなかったようで、2018年1月のカフェで登場いただいた有機化学者でコミュニケーターの佐藤健太郎さんは、冒頭のような感想を語ってくれました。

参加者には、メディア関係、医療従事者、研究者、法律家、音楽家、行政官、主婦……様々な立場の方がいますが、自身の立ち位置から率直に問い、感想を語り、納得する、というカフェの雰囲気は、おのずと仲間意識を生み出します。

「ミニ」だからこそ伝わる世界、著者の本音と人となりを味わうカフェを、本年も目指していきたいと思います。

小出重幸（こいでしげゆき）1951年東京生まれ。科学ジャーナリスト。北海道大学理学部卒。元インペリアル・カレッジ・ロンドン客員研究員。政策研究大学院大学（GRIPS）客員研究員。昭和薬科大学講師。